

グループディスカッションを通じた企業研修「心のアドベンチャー(Adventures In Attitudes)
の高等教育への導入について(試論)

グループ・ディスカッションを通じた企業研修 「心のアドベンチャー(Adventures In Attitudes)」の 高等教育への導入について(試論)¹⁾

荒 木 義 修

(武蔵野大学政治経済学部教授)

一 グループ・ディスカッションを通じた 企業研修「心のアドベンチャー」

グループダイナミクス研究所(Group Dynamics Institute, Inc. GDI)は、日本の中小研修会社のひとつであり、一九七五年八月に設立された。一九七三年一〇月、柳平彬氏が米国ミネアポリスにて、ボブ・コンクリン(Bob Conklin)が考案した、コーディネーターによる「心のアドベンチャー(Adventures In Attitudes, AIA)」公開コースに参加し、AIA日本語版開発権を獲得したのが、その設立契機であった。

一九七六年二月には、GDIはAIAコースを開設した。一〇年後の一九八五年一月には、AIA参加者

は一〇万人に、一九九三年二月には三〇万人に達し、二〇〇二年五月にはA I A参加者は四〇万人を越すに及んだ。しかし、このような企業研修会社は、現在の日本では、一〇〇〇社を超えるという競争的市場下にある。G D Iの企業理念は、グループダイナミックス（集団力学）を活かした相互啓発の場を通じて、自己のアイデンティティ、存在理由、哲学信念を、明らかにすることである。すなわち、A I Aの場を通じて、心構えや態度の変革を起こし、人生をより積極的に生きるプロセスを支援することにある。

A I Aは、自発的なやる気（内発的意欲）を喚起し、こころの筋肉を鍛え、左記の三つの目標を達成するために、全三〇時間、一〇ラウンド、七四課題にわたるグループ・ディスカッション（G D）を通じた三日間の合宿形式をとっている。

1. 「志」を持った人生目標・哲学信念・未来設計の明確化

2. コミュニケーション能力の向上と人間関係・職場・組織の活性化

3. 危機管理におけるヒューマン・エラーの防止

ラウンド1 効果的なコミュニケーション

ラウンド2 心構えの自覚

ラウンド3 感情のコントロールの仕方

ラウンド4 人間理解の方法

ラウンド5 魅力的なパーソナリティ

ラウンド6 人間関係の改善法

ラウンド7 説得力とリーダーシップ

ラウンド8 やる気を起こす方法

ラウンド9 未来設計の明確化

ラウンド10 新しい人生への旅立ち

一方的な講義スタイルではなく、二つのユニット(1ユニット90分)からなるラウンド毎に、四〜六人規模のグループに分かれるGD、ロールプレイング、ゲームなどが用意され、参加者同士による相互啓発・実践学習がなされる。その結果、普段気づかなかった既成概念に気づき、積極的な心構えを身につけ、それを行動に移すことを、「心のアドベンチャー」と呼んでいる。また、GD I公認のコーディネーターがコースを担当し、マニュアルに指示してある通りに、ディスカッションを進行させ、時間の管理を行う。また、グループごとにリーダーが決められ、リーダーは、ディスカッションが活発に行われるように、グループをリードし、討論結果を取りまとめ発表する。課題ごとにリーダーは交代し、ユニットごとにグループの構成メンバーも、くじ引きで入れ替えを行う。

対象者は、中堅管理職やビジネスリーダー、営業職、職種転換候補者、昇進前の部門長、昇進候補者、中高年層、入社三ヶ月位の新人社員、学校の先生、医者、就職活動をしている学生、第二の人生を迎えている人、公務員などである。

AI A研修プログラムは、すでに、高木晴夫氏、千田茂博氏によって、「自分は環境を変えることができる」

という積極的な自己認知を促進する効果があると分析されている。また、A I Aは、組織活性化のための基本となる個人の活性化にも効果があるという。

つまり、A I Aは、参加者の自己認知が、次のようなプロセスで変容することを狙っている。

- (1) 参加者は、さまざまな課題についてGDを行う。
- (2) 参加者は、GDを通じて、自己イメージを洞察し、他者からどう見られているかを知る。
- (3) 参加者は、自己イメージを明確にし、自らの人となりに消極的な部分があることに気づく。
- (4) 参加者は、積極的な新しい自己イメージをもつならば、自分自身が変容し、自己宣言を通じて、自己認知を変容させることができる。
- (5) 参加者は、自分なりの個性を発展させる自己イメージと目標を定め、それを達成するための計画を考へる。

表1 A I Aの効果測定のための質問群I

①	話し上手というより聴き上手である。
②	相手が話しているとき、自分の意見をはさまずじっくりと聞く。
③	自分の欠点や短所を気にしたり悩んだりせず、長所を生かそうとする。
④	嫌いだ、厭だ、がっかり、疲れた等のマイナスとなる消極的な言葉を使わず、自分にプラスになる積極的な言葉を使う。
⑤	感情的になったり、カッとなったりせず、気持は安定している。
⑥	ほかの人が、自分の噂をしていても気にせず冷静でいられる。

グループディスカッションを通じた企業研修「心のアドベンチャー(Adventures In Attitudes)
の高等教育への導入について(試論)

⑦	他人についてあれこれ批判したり、判断したりせず、その人を理解するように努める。
⑧	他人の欠点や短所を気にしたり、イライラしたりせず、他人に対して寛大である。
⑨	人に忠告や批判をすすんで求める。
⑩	引込思案にならず、人に積極的に話しかける。
⑪	人の長所を見つけて積極的にほめる。
⑫	自分の思いどおりにならない問題にぶつかってもイライラせずにじっくり忍耐強く取組む。
⑬	自分は人により印象をもたせられる。
⑭	話し合いのとき、自分の見解の主張より、相手の見地に立って考えるように努める。
⑮	自分の生き方や仕事に信念をもっている。
⑯	失敗を気にしたり思い出したりせず、成功体験を思い出すようにする。
⑰	「忙しい」とか「出来ない」とかいうことばを使わず、時間を効果的に活用している。
⑱	本を読んだり、夜の間の学校に通ったりして、自己啓発のための時間を毎日とっている。
⑲	将来に期待し、目標を持って生きている。
⑳	自分が人生になにを求め、なにになりたいかという生涯設計がはっきりしている。

さらに、高木氏らは、A I A参加者の積極的な人格への変容効果を測定するために、仕事や生活における前向きな「考え方」や積極的な態度に関する質問群Ⅰと、積極的に前向きな活動や行動の「実行」に関する質問群Ⅱを、五段階評価で作成した。A I Aの研修直前と直後に、質問群ⅠとⅡにA I A参加者に回答してもらい、

両者を比較して、A I Aの効果測定を行った。その結果は、研修直後の回答は、直前の回答よりも、すべての項目で、肯定的な評価が高まっていることがわかった。すなわち、A I Aが、参加者に積極的な考え方や態度をもたせ、積極的な行動を実行させようとしている効果があるということが実証された。

G D Iでは、高木氏らの研究後、質問群Iを使用したアンケート調査を継続的に実施してきている。表1は、質問群Iの二〇の質問項目である。図1は、最近、A I Aに参加した人たち一九五人の項目別の研修直前と直後の平均点を折れ線グラフで図表化したものである。³⁾明らかに、A I A研修直前よりも直後の方が、肯定的な評価をなす人が多い。A I Aプログラムが仕事や生活における前向きな考え方や積極的な態度を促進していることがわかる。

二二二〇一三年参議院選挙と青年のヤル気・意識調査

G Dを通じた企業研修の高等教育への導入効果を測定するために、二〇一三年六月にパイロット(予備)調査として、「次期参院選と青年のやる気・意識調査」を実施した。被験者は、武蔵野大学政治経済学部と関西外国語大学外国語学部の学生二九二名である。被験者の内訳は、性別に見ると、男性が一四七名、女性が一四四名である。学年別にみると、一年生が九九名、二年生が七三名、三年生が八八名、四年生が三〇名である。サンプルは比較的偏りのない分布であると言えよう。支持政党や投票予定政党も一般の世論調査と近似しており、⁴⁾選挙結果を十分予測できたデータであり、被験者が正確に回答を施しており、データの質も高いと判定できる。

グループディスカッションを通じた企業研修「心のアドベンチャー(Adventures In Attitudes)
の高等教育への導入について(試論)

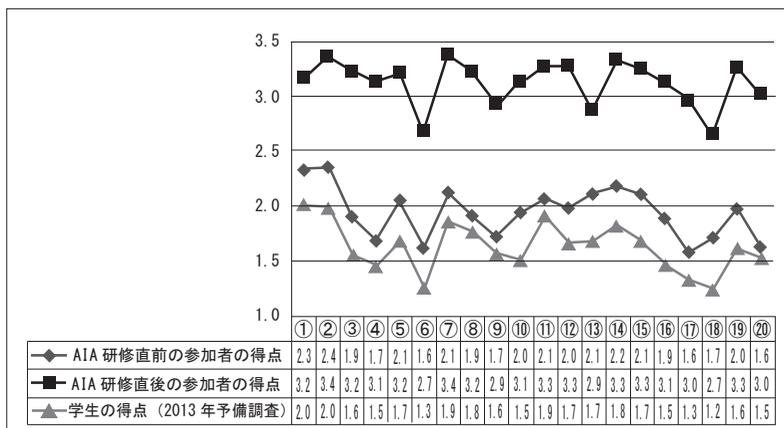


図1 AIA 効果測定のための項目別平均得点

パイロット調査では、先述のAIAの効果測定に関する質問群Iの二〇項目も学生たちに回答してもらった。その結果は、図1に示されているように、一般社会人のAIA研修直前よりも全体的に低い。しかし、項目別の平均点の変化は、一般社会人のAIA研修直前の平均点と極めて高い相関(ピアソンの相関係数〇・八九)示しており、学生の傾性は一般社会人と極めて類似しており、AIAプログラムを学生たちが体験すれば、すべての項目で平均点が増すことが容易に推定できる。

パイロット調査では、AIAプログラムが、教育への一般的効果ばかりでなく、学生たちの政治的社会化を促進するものであるかどうかを考察することに主眼点が置かれている。しかし、副産物として、青年の「やる気」意識の低下と「自殺志向」という社会病理ともいべき現象が明らかとなったので、AIAプログラムが、そのような症候群を矯正する力があるかどうかをも考察の対象とした。

日本では若者の政治離れ、投票率の低下が大きな問題となっている。パイロット調査では、若者の投票・棄権を規定する要因について、パス解析を行った。図2は、その結果を示している。投

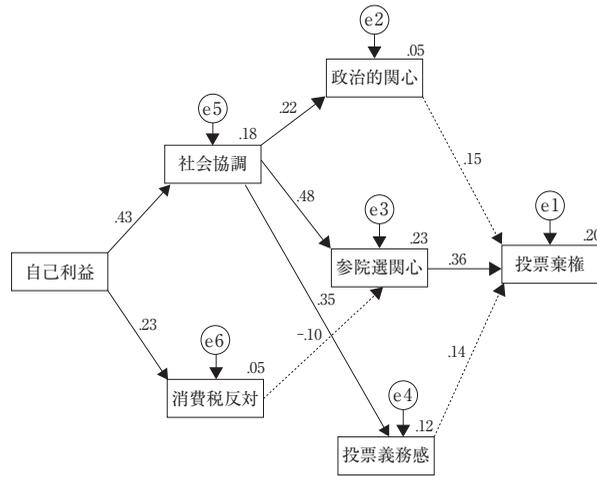


図2 2013年参院選挙への投票要因(パス解析)

票動機は、自己利益 → 社会協調 → 参院選への関心

↓ 投票という因果連鎖が有意であることを表している。

従来の調査では、投票義務感と当該選挙への関心という二つの要因が前面に出てきたが、今回の参議院選挙でのパイロット調査では、参院選への関心のみが重要な要因として突出している。しかも、一見矛盾するように見えるが、「選挙で投票に行くのは、自己利益を守るためである」という意識が、「選挙で投票に行くのは、社会と協調することである」という意識を生み出し、そのような社会協調意識が若者たちの参議院選挙への関心を高め、若者たちは投票に出かけているということが明らかになった。選挙を通じて、自己利益を守ることが、社会協調を生み出すという新たな知見が提供されている。「自己保存」⁵⁾のためには社会協調が必要であるという本能が働いているといってもよいかもしれない。

さらに、パイロット調査では、「普段、やる気がなくなることもある」と答えた者が、八五・八%にも上り、二〇一二年六月に実施した同様の「次期総選挙と青年のやる気・意識調査」(被験者数二一六六人)よりも、六%増加した。さら

に、「今までの人生で自殺をしたかったことがある」と答えた者は、三九・二%であり、同様に、前年度よりも七%増加した。このような学生たちの社会病理とでも言える症候群は、日本の経済危機と深く関連性があると考えられる。六〇年代の高度経済成長後、石油ショックを契機に、低成長時代を迎え、オウム真理教に代表されるような第三次宗教ブームが生まれた。さらに、一九九一年にはバブル経済が崩壊し、日本は「失われた二〇年」という長期不況を経験し、一九九八年には、日本の自殺者の数は一気に急増する。調査対象者の学生たちは、このバブル経済崩壊と同時に生まれ、思春期を長期不況の真ただ中で育った。低成長時代は若者たちの間では、癒しを求めて宗教ブームが発生したが、バブル崩壊後のマイナス成長時代に入ってから、宗教に代わって、「自殺志向」が若者の間に蔓延しているということであろうか。内閣府『自殺対策白書』(二〇一三年度版)によれば、自殺者の全体の数は九年ぶりに、三万人を下回ったけれども、二〇代の自殺死亡率は高まる傾向にあるという。

三 A I Aプログラムの高等教育導入の効果について

A I Aプログラムの高等教育導入の効果を考察するためには、A I Aプログラムの効果測定に使用された先述の質問群 I を独立変数にし、投票動機を促進する「選挙で投票に行くのは、自己利益を守るためである」という自己保存本能、さらに「やる気」と「自殺志向」を従属変数にして、両者の関係を考察する必要がある。そこで、とりあえず、質問群 I の二〇の質問項目は、類似のものが多数あると判定されるので、相関係数を出して、類似の質問項目を削除し、質問群 I を②③⑥⑦⑨⑪⑫⑬⑭⑱⑳の一一項目に縮小した。さらに、

表2 主成分分析

	成分		
	1	2	3
②	.292	-.113	.683
③	.351	.573	.166
⑥	-.296	.464	.595
⑦	.224	.135	.699
⑨	.237	.496	.110
⑪	.580	.218	.244
⑫	.637	.278	.108
⑬	.714	.229	-.040
⑭	.634	.076	.242
⑱	.128	.666	.025
⑳	.150	.697	-.017

この一一の質問項目の特徴を把握するために、主成分分析（バリマックス回転）にかけてみた。表2は、その結果である。第一主成分（分散の% 29.686）は、左記の四つの項目に関するものであり、「問題解決」の成分であると言える。

・⑪人の長所を見つけて積極的にほめる。

・⑫自分の思いどおりにならない問題にぶつかってもイライラせずにじっくり忍耐強く取り組む。

・⑬自分は人により印象をもたせられる。

・⑭話し合いのとき、自分の見解の主張より、相手の見地に立って考えるように努める。

第二主成分（分散の% 10.259）は、左記の四つの項目に関するものであり、いわゆる「志」と呼ばれる成分だと考えられ、「志」概念を定義づけている。⁶⁾

・③自分の欠点や短所を気にしたり悩んだりせず、長所を生かそうとする。

・⑨人に忠告や批判をすすんで求める。

・⑱本を読んだり、夜間の学校に通ったりして、自己啓発のための時間を毎日とっている。

・⑳自分が人生になにを求め、なにになりたいかという生涯設計がはっきりしている。

第三主成分(分散の% 10.126)は、左記の三項目に関するものであり、「人を理解する」成分であるといえよう。

- ・②相手が話しているとき、自分の意見をはさまずじっくりと聞く。
- ・⑥ほかの人が、自分の噂をしても気にせず冷静でいられる。
- ・⑦他人についてあれこれ批判したり、判断したりせず、その人を理解するように努める。

A I Aプログラムが掲げている先述の三つの目標と一〇のランド内容が、「問題解決」、「志」、「人を理解する」という三つの主成分とうまく対応していることがわかる。さらに、このような三つの主成分を潜在変数にして共分散構造分析にかけ、「自己保存」本能、「やる気」、「自殺志向」との関係を考察した。有意なモデルは、図3のような「志」に関するものだけであった。図3から明らかのように、一一の質問項目の「志」という主成分のみが「自己利益(自己保存本能)」と「やる気」と有意な因果関係にあることを示している。したがって、A I Aプログラムを高等教育に導入して、学生たちにA I Aを体験させれば、「志」が、自己保存本能意識を高揚させて、投票参加を促進し、また、「志」によって、「やる気」もでてくること示されており、A I Aプログラムの高等教育への導入が極めて有意義であることが示唆されている。しかしながら、A I Aプログラムが「自殺志向」を矯正できるというような因果関係は、今回は残念ながら認められなかった。近日実施予定の本調査では、東北大地震の心理的影響、経済危機によるアノミー(既成の価値観崩壊)などの別の要因を探り、またサンプル数を増加するなどのデータの改善を図り、「自殺志向」の分析を改めて検討してみたい。

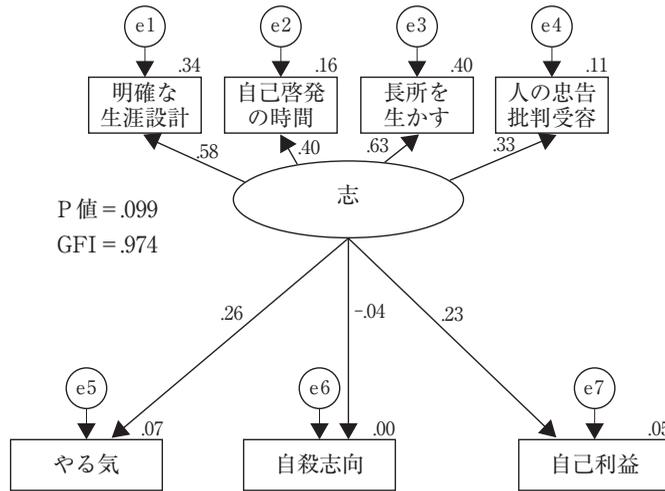


図3 共分散構造分析

なお、すでに、日本の一〇〇近い大学で、GDを活用し、形式的にはAIAに類似するプログラムが大学教育の新生に導入されている。ラーニングバリュー社（RV）による組織開発プログラム「自己の探求」がこれである。左記のような五つを目標に、おおよそ一〇個のグループワークが設定され、二日間の集中講義が設定されている。⁶⁾

- ① チームビルディングの体験をする⁷⁾
- ② チームをつくる相互フィードバックの体験をする
- ③ 他者の自己理解を深めることに協力する体験をする
- ④ ①、③を通じて受講前より自己理解が深まる
- ⑤ チームの一員としての自己の特徴を理解するとともに、他者に協力することでチームに貢献できることを理解する

グループワーク1「あなたの学習スタイル」

グループワーク2「グループینگ・自己紹介」

- グループワーク3 「総当たりインタビュー」
- グループワーク4 「コンセンサスを求めて」
- グループワーク5 「私の大切なもの」
- グループワーク6 「私のライフポジション」
- グループワーク7 「私を生かすコミュニケーション」
- グループワーク8 「バスは待っててくれない」
- グループワーク9 「イメージ交換」
- グループワーク10 「私の得たこと・学んだこと」

「自己の探求」コースでは、グループワークを通じて、課題を協力しながら解決し、よりよいチームを作っていく体験の中で、自己理解、他者理解、目標の統合を達成し、学生生活への自信を深めさせることをねらいとしている。

このような「自己理解を深める体験が大学生の心理的側面に及ぼす影響」については、ラーニングバリュー総合研究所の水野基樹氏が考察を進めている。⁽⁸⁾「自己の探求」プログラムを体験した学生たちにアンケート調査を実施し、因子分析を加えて、「自己理解の変容」、「学校理解の変容」、「他者理解の変容」という三つの側面から、その心理的影響を分析した。「自己理解の変容」については、広い視野の獲得、セルフコントロール、「学校理解の変容」では、学校での友人づくり、学校行事への参加、「他者理解の変容」については、周囲への貢献、他者尊重、他者受容、自己開示、他者の信頼という五つの効果が認められたという。

しかし、現実的には、現在の学生たちは、「失われた二〇年」という長期不況の中で育ってきたためか、あるいは一人っ子が多かったのかどうかわからないが、人間関係づくりに困難性を覚え、さらには自らの考えを相手伝える術を身に付けておらず、人を説得するのが不得意であると言われている。実際のところ、このような基本的な問題を克服するのに、「自己の探求」プログラムは効果を発揮していると思われる。しかしながら、たとえば、「自己理解の変容」については、広い視野の獲得、セルフコントロール以外にも目標の達成と創造、前向きな考え方（ポジティブシンキング）、問題解決なども寄与率が高い。したがって、時間的には、今後は、それらを一層高揚させる手段を考えなければならないが、これらの問題に力を入れているのがA I Aプログラムであると考えられる。「学校理解の変容」についても、今後は寄与率の高い「学校への興味」すなわち学習意欲を向上させることも考えなければならない。

いずれにせよ、GDを通じた合宿形式の研修を高等教育に何らかの形で活用するためには、学生たちの現状分析が何よりも必要であり、そのような確な現状分析に基づいた高等教育が構築されなければならない。「教育とは何か」という大きな問題も立ちはばかってくるが、GDIの「心のアドベンチャー」とRVの「自己の探求」プログラムの機能は相互に重複するところもあるが、極めて有用なものである。「自己の探求」は、大学に入学する直前、直後に行われるケースが多く、入門的な研修教育と位置付けられているの

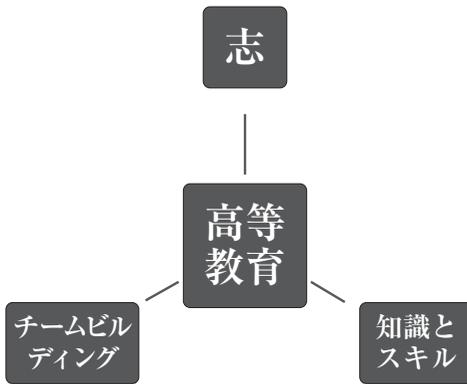


図4 教育方針の三本柱

で、上位のプログラムであると考えられるA I Aプログラムは一年次後半もしくは二年次後半に導入することが、当面の高等教育には必要なことのように思われる。知識とスキル偏重の教育から、「志」とチームビルディングを含む三本柱を基本方針に掲げた教育改革が急務であると言っても過言ではない(図4参照)。同時に、研究者側にもこのような三本柱が必要であることに気づいて欲しい。

注

- (1) 本論は「Yoshinobu Araki, "Introducing Corporate Training through Group Discussion: 'Adventures In Attitudes' in Higher Education in Japan" (Paper prepared for IPSA's RC21-29 International Expert Conference Xuzhou, China, September 18-20, 2013) に加筆修正を加えたものである。
- (2) 高木晴夫・千田茂博「組織活性化のための人間の活性化―積極的人格への変容プログラムの効果―」、慶應義塾経営管理学会『慶應経営論集』第7巻第1・2号、32―49頁参照。
- (3) 被験者は平成二二年一〇月から平成二五年二月にかけてG D I の川崎生涯研修センターのA I Aコースに参加した人たちである。
- (4) 支持政党の分布は、自民党三四・三%、民主党五・二%、日本維新の会三・八%、公明党一・七%、みんなの党一・七%、共産党〇・三%、みどりの風〇・三%、新党大地〇・三%、その他〇・三%、支持政党なし五・九%で、投票予定政党(選挙区)は、自民党四四・三%、民主党五・二%、日本維新の会三・八%、公明党〇・五%、みんなの党一・四%、共産党〇・五%、新党大地一・〇%、未定四三・三%であった。
- (5) ここで言う「自己保存」とは、「利己行動」と言う言葉に限定されるものではなく、広く「どのように生きたらほんとうに喜びに充ちた現在を生きることが出来るか」という問いかけも含まれている(真木悠介『自我の起原―愛

とエゴイズムの動物社会学―」、岩波書店、参照。

(6) 「志」の概念については、グループダイナミクス研究所『志とは何か―蘇生論― 志学のすすめ①』、『志とは何か―実践編― 志学のすすめ③』、タイプ印刷、非売品が参考となる。

(7) 二〇一三年度武蔵野大学シラバス「自己の探求1」（中村剛担当）参照。

(8) チームビルディングについては、北森義明『組織が活きるチームビルディング』（東洋経済）参照。

(9) 水野基樹「自己理解を深める体験が大学生の心理的側面に及ぼす影響」（第3回大学セミナー 学上課程教育でのチャレンジ）「自己理解を深める体験によって学生が自ら動き出した！」（第一部）研究発表資料。